夏の終わりに

高橋　正

学生時代の夏休みはいつも、駈け足で過ぎて行った。新聞記者時代には夏休みなどというものはなかった。夏休みをじっくり味わえるようになったのは、齢五十を幾つも過ぎて教師になってからのことである。こんなことなら、もっと早く教師になっておけばよかった。

このところ、毎夏、若い教え子たちと海外をほっつき歩くのを習いにしているが、これがまた楽しい。外報記者をしていたので、外国旅行といっても国内旅行するのとさして変らない。日本というしがらみから解放されるだけ、むしろ気楽である。とりわけ、若い連中と一緒だと、彼らの姿に若い頃の自分を重ねて見ることも出来るし、それを眺めている還暦前の自分を感ずることも出来る。それよりもなによりも、自分で重い荷物を運ばないでも済むのがよい。今時の若者と言っても、大勢の中には必ず二三、手を貸してくれる気の利いた若者がいるからだ。

学生たちの団体旅行だから、業者の手を通すが、行き先と旅程は自分で決める。業者任せにしておくと、旅の『定食』しか食わせてもらえないし、外国ならこちらの方がプロだという自負があるからである。学生相手の旅行だから『研修旅行』と銘打っているが、十日や二週間で、素人の若者になにが研修出来るわけでもない。なにがしかの見学やレクチャー、現地学生との交流などはスケジュールに入れているが、あとは専ら遊びである。遊びに優る勉強はないというのが筆者の信念でもあるからだ。

実際、遊びほど創意とエネルギーの要るものはない。ディズニーランドだのなんとかリゾートだの、世に娯楽施設は様々あるが、そういう所へ行く人は自ら遊ぶのではなくて、遊ばされるのである。世上、大学のレジャーランド化が非難がましく言われてから既に久しいが、筆者はレジャーランドで結構だと思っている。同じレジャーランドでも、大学は他のレジャーランドと違って遊戯施設などなにもない。キャンパスはいわばまっさらなキャンバスのようなものだ。そこで遊ぶには学生は自ら遊びを創りださなければならない。遊びを面白くするためには、渾身の創造力と行動力を振るう必要がある。しかし、想像力とエネルギーさえあれば、キャンパスというキャンバスに思うままのシュプールを描くこ

とも、己れの城を築くことも出来る。それが青春というものだろう。

教室で習うことなどたかが知れている。勉強は図書館でやり、わからなければ研究室に行って教師に聞けばよい。あとは教室を飛び出すことだ、「書を捨てよ」とは言わないが（もともと、今時の学生は書など持っていない）、街に出でよ。国内であれ国外であれ、そこにこそ、本当の教室がある。とりわけ、若い時代に外国に行け。そのためのアルバイトなら幾らやっても宜しい。

というわけで、今夏も十五名ほどの学生有志と、西域は河西回廊・天山北路のあたりを彷徨い歩いて来た。一口に砂漠と言っても、文字通り砂漠あり、土漠あり、礫漠ありと様々であること、山はおしなべて禿げ山であること、しかし水さえあれば木が生えること、逃げ水（蜃気楼）、昼夜の温度が途方もなく違うこと、色々な民族が袖擦り合わせて生きていること、『改革開放』の中国では、砂漠の中のウルムチにまでホリデー・インやカラオケが進出し、上から下まで金儲けに狂奔していること、新疆ではイスラムとロシアの影が極めて濃いこと、ベゼクリクや敦煌の千仏洞に見る宗教の力の凄さまじさ、教科書や『ドラゴン・ボール』でしか知らない三蔵法師と『西遊記』の本物の世界、初めて聴くラクダの鈴の音と目も口も開けられぬ砂嵐、ブドーや西瓜がここから世界に広まったこと等々を、学生たちは否応なく実感したはずである。陽関跡に立って王維の詩「君に勧む更に尽くせ一杯の酒　西に陽関を出づれば故人無からん」を、西安の安倍仲磨旧居では「あまのはらふりさけみればかすがなる」の三十一文字を、実感とともに覚え直した学生もいたようだ。

西域への往還には、北京と上海にも立ち寄ったが、雷雨をやり過ごして一斉に万里の長城を駆け上がる学生たちの姿は、竜に打ち跨がる若武者の姿を彷彿させ、和平飯店（旧キャセイ・ホテル）のバーでオールド・ファッションのライブ・ジャズを楽しむ彼らの乗りには、戦前戦後の五十年の時空を越える趣があった。とりわけ、行く先々の若い中国人ガイドたちとの出会いは学生にとって新鮮な体験だったようである。大勢の日本人学生を初めて相手にした中国人ガイドにとってもそれは同様だったらしい。筆者にとっても、双方の若者が教科書では習わぬ中国史や日中関係史の裏話を聞かせてやれるのは、願ってもないことであった。これだから『移動教室』は止められない。上海から大阪までの定期フェリー『鑑真号』の海路も今回は平穏であった。

今夏は中国旅行に出掛ける前にも、気心の知れた研究者仲間と、先方の招待で北朝鮮に行って来た。その体験記は『キムキムランド訪問記』と題して『中央公論』の十一月号（九二年）に書かせてもらったが、平壌行きの目的の一つは来年の夏、学生を連れてこの「近くて遠い国」を探訪するための地均しにあった。この目論見はどうやら実現しそうである。となると、今度は学生たちを口説かなければなるまい。

若い頃は、水平線の彼方に遠ざかる入道雲を眺めながら、行く夏を惜しんだものだったが、不思議なことに、還暦を迎えようとしているいま、夏の終わりを迎えても何の焦りも悔恨もない。老耄れて無感動になったのではない。また、若者たちと行く夏が確実にやって来るという想いがあるからだ。もちろん、そんな夏がいつまでも続くとは思わないが、願わくは、「旅に病んで　夢は枯れ野を　駆け巡る」故人にあやかりたいものである。『ベニスに死す』とまでは恰好良く行かないにしても。（了）